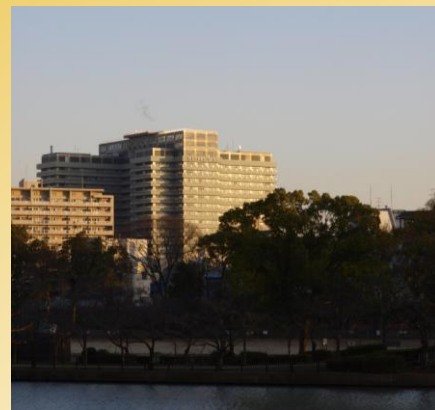


和



「大川」より朝日に照る総合医療センター

第39号 (平成28年 新春号)

編集：大阪市立総合医療センター 地域医療推進委員会
(〒534-0021 大阪市都島区都島本通 2-13-22)
<http://www.osakacity-hp.or.jp/ocgh/>

新年あけましておめでとうございます



地方独立行政法人大阪市民病院機構 理事長
大阪市立総合医療センター 病院長 瀧藤 伸英

新年あけましておめでとうございます。

皆さまにおかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。平素より当総合医療センターをご利用いただきまして、職員一同心より感謝申し上げます。年頭にあたり一言ごあいさつを申し上げます。

さて、当センターは「実は医療レベルの高い病院です。近くにある、大きな、公立の、総合病院というだけではありません。市内にある5つのがん診療連携拠点病院、市内2つの総合周産期母子医療センター、市内6つの3次救命救急センター、市内6つの小児3次救急医療拠点病院、市内唯一の感染症指定医療機関、さらには全国で15の小児がん拠点病院のそれぞれひとつ、等々の病院です。ほかに、数施設の病院でしかできない治療もしており、患者さんは遠くからも受診されています・・・」と胸を張れる病院ですが、残念ながら、まだ「知っている人は知っているが、知らない人は知らない」状況です。言い換えれば、アピール下手、アピール不足でした。

そこで、1年前に地方独立行政法人になったこともあり、当センターの高度専門医療が少しでも多くの患者さんに役立てるように、これからは精一杯アピールしていきたいと考えています。

皆さまに当センターのセールスポイントである最先端の診療内容を是非とも知っていただけるように、ホームページに「総合医療センターで最先端の治療を」というコーナー（リンクバナー）を新しく作りました。内容を少し紹介しますと、「ハイブリッド手術室」「手術支援ロボット『ダ・ヴィンチ』」「心房細動の新しい治療『冷凍アブレーション』」「手術をしない心臓弁膜症の新しい治療『TAVI』」などです。一度当センターのホームページをご覧いただければ幸甚に存じます。

本年も「安全、安心、納得の医療」を皆さまに提供したいと思えます。患者さん及び市民の皆さまの信頼にお応えできるよう、職員が一丸となって取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



■ 専門外来のご案内

「網膜硝子体外来」

大阪市立総合医療センター 眼科部長 森 秀夫

網膜硝子体外来は、眼底（目の奥）を診断治療する外来です。対象とする疾患は直接視力に大きく影響する病気です。ちなみに、日本の視覚障害者数ですが、良い方の目の矯正視力（メガネ視力）が0.5以下の方が165万人（人口の1.3%）です。今回は頻度の高い糖尿病網膜症、黄斑変性のお話をしましょう。

◆糖尿病網膜症

視力障害者の約2割を占め、糖尿病で長年（5年以上）にわたり血糖コントロール不良の人に出る目の病気です。日本人の糖尿病患者の15～20人に1人が何らかの視力障害を患っています。ただし糖尿病網膜症は視力が良いうちから始まっているので、かかりつけの眼科を持ちしっかりと目の管理をしていくことが重要です。視力障害の原因は目の奥の腫れや出血などいろいろですが、網膜硝子体外来ではかかりつけ医からの紹介患者を対象として、病気の状態を的確に診断し、それにあった治療をしています。治療にはレーザー光線を目の奥に当てるものや、特殊な薬を目に注射するもの、手術をするものなどがあります。

◆黄斑変性

視力障害の1割強を占め、加齢黄斑変性が最も多く、我が国での患者数は成人の約1%、50～70万人と推定され、欧米ではその4倍に上ります。

症状は進行性とともに見え、物が歪んで見え、視野の中心が見えなくなります（中心暗点）。中心暗点は、人の顔を見ると輪郭は見えても目鼻立ちが見えないとか、本を読んでも見たい字の上下は見えるが肝心の見たい字が見えないため本が読めないなどの症状を起こします。これらの症状はメガネではなおすことができません。1例として橋の写真を見た場合、左図のように見えると正常ですが、中心暗点があると右図のように真ん中が暗く見えなくなり、見えている部分も歪んでいます。

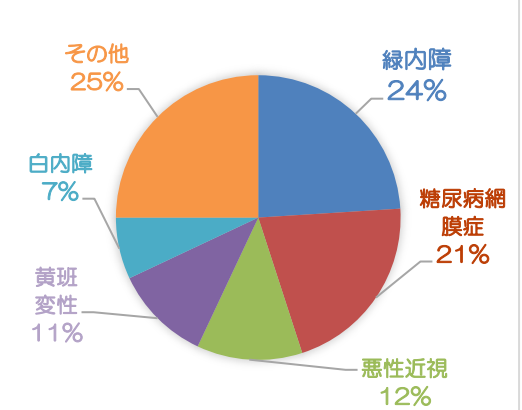
黄斑変性の目の奥（眼底）の写真です。赤い色は出血です。黄色く見えるのはたんぱく質や脂肪が血管からしみ出たものです。

加齢黄斑変性症は、目の奥に異常な血管のかたまりができ、そこからタンパク質や脂肪がしみ出してたまります。また血管が破れて出血します。

治療法はいくつかありますが、どれも異常な血管を破壊することを目的としています。治療が有効であれば、失明からまぬがれ、現在の視力の維持やある程度の改善が期待できます。しかし、残念ながら元の良い視力に戻ることはありません。それは、異常な血管が破壊されても跡形もなく消え去ることはなく、その跡を目の奥に残すためです。

黄斑変性は早期発見が重要です。それには片目ずつの見え方を確かめます。例えば左目だけで障子の棧（さん）を見ると真っすぐ見えるが、右目だけで見ると歪んで見えると右目に異常があります。このような場合はまずかかりつけの眼科を受診して下さい。

視力障害の原因



糖尿病網膜症での目の内部の出血



■ がんの診療について

「肝細胞がん」

大阪市立総合医療センター 肝胆膵外科部長 金沢 景繁

◆肝細胞がんについて

肝がんには、肝臓そのものから発症した「原発性（げんぱつせい）肝がん」と他の臓器のがんが肝臓に転移した「転移性（てんいせい）肝がん」があります。原発性肝がんの約90%を肝細胞がんが占め、約10%が胆管（たんかん）細胞がんです。原因としてはC型肝炎やB型肝炎などのウイルス感染によるものがその大半を占めていますが、脂肪肝炎やアルコール性肝炎からの発症も見られます。そして、ウイルス性肝炎などの肝臓病が進行するとともに、慢性肝炎、肝硬変と進行していき、そしてこの状態が持続すると高率に肝細胞がん（以下肝がん）が発生してきます。

◆肝細胞がんの症状

肝臓は「沈黙の臓器」と呼ばれ、初期には自覚症状がほとんどありません。慢性肝炎などで病院に通院中に見つかることが多いですが、定期的な検診や精密検査、他の病気の検査のときにたまたま肝がんが発見されることもあります。

◆肝細胞がんの検査

肝がんの検査としては、超音波検査やCT、MRIなどの画像検査と腫瘍マーカー検査を組み合わせで行います。必要があれば針生検などの検査を追加して行います。

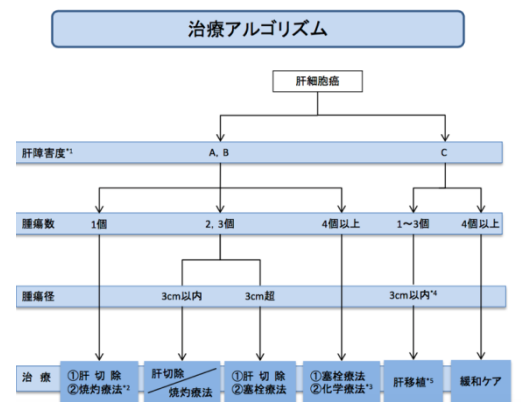
◆肝細胞がんの治療法

肝がんの治療は、がんの進行度とその患者さんの肝機能とのバランスで選択されるという特徴があり、治療法については日本肝臓学会の「科学的根拠に基づく肝臓診療ガイドライン」の治療アルゴリズム(図1)が参考にされており、肝切除、焼灼療法、塞栓療法が中心になります。肝切除は外科医、焼灼療法は内科医、塞栓療法は放射線科医が行いますが、当院では開院以来、これら肝がんの専門家が週に1回集まって、それぞれの患者さんに応じた適切な治療法を検討しております。ただ、肝がんの治療後も、慢性肝炎や肝硬変はそのまま変わらず残るため、治療後も比較的高い割合で再発し、そのほとんどが肝臓に生じることが知られています。このため、がんの治療後に、慢性肝炎や肝硬変に対する対策が重要になります。

◆肝細胞がんの新しい外科治療

肝がんの治療法のうち、肝切除は根治性の高い治療法であることが知られています。最近、肝切除も腹腔鏡で施行できるようになっており、創の小さい腹腔鏡下肝切除により、術後腹水などの発生が少なく、退院や社会復帰までの期間が短い、癒着が少なく再発治療に有利などの利点があることがわかっており、当科でも多くの肝がんの患者さんに対して施行しております(図2)。ただ、すべての肝がんにはできず、それぞれの患者さんごとに判断する必要があります。こういった様々ながんの治療と発がんリスクを減らすことが、肝がんの患者さんには大切です。当院では専門各科で連携して患者さんに応じた最適な治療を提供することができますので、ぜひご相談ください。

(図1) 「科学的根拠に基づく肝臓診療ガイドライン」の治療アルゴリズム



(図2) 腹腔鏡下肝切除の手術の様子





健康豆知識



< 特別編 >

『目はロマンチック』

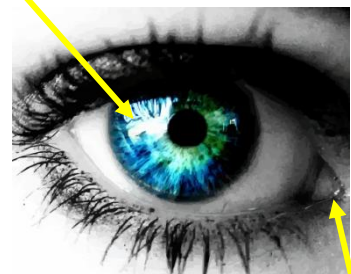
眼科部長 森 秀夫

俗に「目は口程に物を言う」と申します。色っぽい女性の流し目などはまさにロマンチックです。しかし、今日のお話はそのような意味でのロマンチックなお話ではありません。れっきとした医学解剖学用語についてのお話です。

解剖学用語といえば、全身の頭の先から足の爪の先、体の表面から内部まで、ありとあらゆる部分に医学的な名前がついていて、医学生の解剖学の教科書は1冊が重さ2kgぐらいの本がなんと3冊セットになっています。

しかし、解剖学用語のほとんどは味も素っ気もない名前ですが、例外的に目にはロマンチックな解剖学用語がいくつかあります。まず「虹彩」。これは黒目の中心の黒い丸（瞳孔）の大きさを変えるドーナツ状のリングです。西洋人はこれがブルーであったり灰色であったりするのですが、その色彩がまさに虹のように見えるというところからつけられた名前です。「虹の彩り」なかなかステキではありませんか。しかし残念ながら日本人の虹彩はこげ茶色です。次は「涙湖」、文字通り涙の湖です。歌の文句に出てきそうですね。これは目頭にあって、いつも涙が溜まっている場所を言います。しかし溜まっている涙の量といえば実際は少量で「スズメの涙」ほどですが。また、ドライアイの場合にはさらに少なくなっています。

こうさい
虹彩



るいこ
涙湖



12月12日（土）市民医学講座「手と足と背骨のスペシャリスト」たくさんのご参加ありがとうございました。

次回市民医学講座のお知らせ

テレビに負けない『家庭の医学』2016

開催日 平成28年 3月12日（土）
PM2:00~PM4:00

場所 大阪市立総合医療センター さくらホール

問合せ TEL06-6929-1221/FAX06-6929-0886

参加費無料/申込不要/手話通訳あり

詳細は決まり次第チラシ、ポスター、ホームページなどでお知らせいたしますのでご期待ください。ただし、都合により日程などを変更する場合があります。